

上演⑤ 四日市農芸高校「アシカの笑顔」

オープニング、「蛍の光」で幕が開く。現実世界では終了のアイコンであるその曲から始まる演出は、これから始まるドラマに興味を引かせる効果があったように思う。つまり「終わり」から始まるということだ。事実、ストーリーは、過去のトラウマに囚われた女子高生の成長物語で、終わりから始まる物語ともいえる。

とある水族館でのバックヤードでおきる日常会話劇スタイル。水族館にインターシップでやってきた高校生、洋子と職員との交流が主軸となっている。洋子は自分に自信が持てず、笑うことが苦手という悩みを抱えているが、それでも職員たちが笑顔で辛いことを乗り越える姿を間近で見て、アシカの笑顔（に見える表情）のように、笑顔で前を見ることから始める大切さを学ぶというお話。

全体的にとっても上質で見応えのある作品だった。特に美術や衣装など、見た目に関する作り込みが細部にまでいきわたっており、またキャストの配役、演技にもリアリティがあり、劇世界にすんなり入ることができた。こういったワンシチュエーションの作品はそういったことが生命線だけに、高く評価したい。また自動扉の反応システムが壊れていて職員の手動によってドアを開閉しなければならないというエピソードは戯曲に書かれていなかったのが今回の座組で新たに付け加えられた要素だと思うが、このエピソードのおかげでペンギンを殺処分しに来る人たちを送り出すとき、扉を開けなければいけない職員、池の葛藤が伝わってきて見事な伏線回収に繋がっていたと思う。

一方、リアリティにこだわるあまり、空間的に見づらいことになっていたのはこれからの課題点として指摘しておきたい。特にデスク後方席に座るひとの顔が席によっては見づらかったり、あるいは座りっぱなしで会話がずっと続くシーンなどは飽きさせない工夫のしようがあったのではないかと思う。リアリティと不自然さの境はとても曖昧で線引きが難しいが、経験を重ねていけば自然と身につくことなので、これからは期待したい。